

第269回山口西田読書会(=2021年4月24日開催分)のプロトコル

担当:末永

第269回は4月25日(土)に開催され、まず、担当者のプロトコルを中心に会が進行した。次に、補足資料として佐野先生がご用意された、野田又夫「知性の時代の哲学」(田中美知太郎編『講座哲学体系』第2巻 哲学の歴史、人文書院、1963年所収)の内、「ライブニッツ」の項を皆で講読した。とくに、「モナド(单子)」の特徴と、無数のモナドの調和的体系としての「世界」の様相について皆で確認した。

プロトコルの報告過程で議論になったのが、第一に、西田の考える「直観〔≡思惟を含んだ直観〕」がどういものであるかということである。また、第二に問題になったのが、特殊〔≡主語S〕と一般〔≡述語P〕との根柢に横たわる「自己同一なるもの」(同書、201頁)(西田によれば、その現れが〈S is P, S=P〉という「判断作用」)として「自ら照らす鏡といふ如きもの」(同書、201頁)と規定される西田の具体的一般者、言い換えると、「真の一般概念」(同書、201頁)であり、「自己の中に自己を映す鏡の如きもの」(同書、201頁)であり、その限りで「真の直観」(同書、202頁)とも言う西田の具体的一般者と、カントの純粹統覚との関係がどうなっているのかということであった。西田は、世界の創造に際して無限の可能的世界を観念し、その中から一つを「最善なる世界」として選択し、現に在るこの世界として現実存在させたライブニッツ的「神の叡智」を念頭に置きつつ、無限の可能的世界を映している一般者に於いて一般者が自ら「此世界」を限定するはたらきを「一般者の自己限定」(同書、201頁)と呼ぶ。さらに、この「一般者の自己限定」が、我々の経験的世界を構成する純粹統覚のはたらきそのものであると考える。ここから、ライブニッツ的神の世界創造という行いが、我々自身の純粹統覚の根柢で、つまり、我々が認識する現場でそのつど起こっているとも言うという指摘がなされた。

そもそも、西田がこの文脈で言おうとする「真の直観〔≡自ら映す鏡〕」とは、主客合一の境地ではなく、「自己の中に自己を見る」(同書、202頁)ことである。西田の考えでは、純粹統覚もまた〈思惟を含んだ直観〕でなくてはならず、しかもこの直観は、「無限に自己を限定して行くといふ意味においては構成作用であり、無限に自己の内に省みるといふ意味に於ては判断〔作用〕である」(同書、202頁)という。たしかに、「直観が無限に可能なるものを蔵する」限り、論証的思惟によっては「達すべからざる奥底」がどこまでも残る。しかし、無限の可能的世界を映し出すものとしての「映す鏡」であり、その意味での「一般概念」(同書、202頁)であり、「総ての实在の根柢に横たはる基体」(同書、202頁)とも考えられるような「直観の一面」が純粹統覚の根柢に想定されうる限り、統覚自身、〈自己限定する一般者〕であり、そのはたらきが、自ら観念した無限の可能的世界の中からただ一つを選択した〔≡限定した〕ライブニッツ的神の世界創造のように、「無限の可能を包むものの自己限定」(同書、202頁)であると、西田は言うのである。

【テキスト】

『働くものから見るものへ』、西田幾多郎全集〔旧版〕第四巻、203頁7行目から204頁8行目まで
(=「働くもの(三)」の第9段落と「働くもの(三)」の第1段落)

【テキスト要約】

この段落でも、〈思惟を含んだ直観〕、あるいは〈思惟を徹底した末に到達する直観〕についての話が続く。西田は直観を、単純に思惟と対立させるのではなく、そもそも直観自身が、構成作用および判断作用〔≡反

省作用)を、自らの根底にある「自己自身を映すもの」(同書、203頁)としての「自ら映す鏡」(同書、201頁)において含むものとして考えているようである。また、「概念的知識が概念的知識自身の立場に於て徹底する」(同書、203頁)時に、言い換えると、思惟が思惟自身を徹底した果てに出会われるこの「単に映す鏡」(同書、204頁)に於いて初めて、特殊なるものが唯一なるものとして限定される〔≒個物と成る〕「矛盾的統一」(同書、203頁)という事態が起こりうるのだと言う。さらに西田は、特殊なるものの唯一的限定〔≒個物の成立〕という事柄を含んだ矛盾的統一という事態を、特殊なるものがこれを包摂しようとする一般概念の「外に出」(同書、203頁; cf. 同書、190頁)ることであるとも言ふ。

なお、「概念的統一の極致は矛盾的統一に到らねばならぬ」(同書、203頁)という一文に関連して、佐野先生から次のような問題整理がなされた。西田が「S is P」という判断の構造を手引きとつづ、「一般的なるもの〔≒述語P〕」と「特殊なるもの〔≒主語S〕」の関係のあり方に即して種々の対象界のあり方を考えようとする話の流れの中で、これまでも、以下の3種の区別が繰り返し問題になってきた。

①「数の世界」(同書、198-199頁)、「数の対象界」「数理の世界」(同書、192頁)、「矛盾律によって構成せられた対象界として〔の〕数理といふ如きもの」(同書、192頁)；「概念的統一」(同書、203頁)という段階

「概念的知識」(同書、195頁)の例：5〔≒特殊S〕は数〔≒一般P〕である。つまり、特殊＝一般

②「物の世界」(同書、197頁)、「経験界」(同書、198-203頁)、「経験し得る物の類概念」(同書、197頁)、「単なる類概念的統一の対象界」(同書、193、194頁)；「経験的一般概念」(同書、193頁)という段階
「経験的知識」(同書、195頁)の例：この花は赤い；この花〔≒特殊S〕は赤いもの〔≒一般P〕である。
；山本さん〔≒特殊S〕は人間〔≒一般P〕である。

*この段階では、一般〔≒述語P〕と特殊〔≒主語S〕との間にどこまでも間隙が残り、現実存在する個物を入れて考えない限り、一般の側から最後の種差を超えることはできない。

つまり、特殊≠一

般

③「矛盾の世界」、「矛盾的統一の対象界」(同書、193、194頁)、「自己矛盾の対象界」(同書、193頁)、「矛盾的限定によって構成せられたる対象界」(同書、193頁)；「矛盾的統一」(同書、199、203頁)という段階

「矛盾」の例：働くものの世界、あるいは働き(力)の世界；質料と形相とからなる個物が、自らの質料性を失い、純粋な働きと化して〔≒働くものから、働くものなき働きへと純化され〕直接に関係し合う事態；「特殊の背後に於ける一般は消え失せて〔単に映す鏡となり〕、〔そこに映されたものとしての〕特殊と特殊〔≒個物と個物〕とが直に相関係し、〔単に映す鏡と成った〕一般なるものは〔そこに映された個物が一切の質料性を失って純粋な働き、すなわち「基体なき作用」としての「現実活動態(energeia)」と成り、この意味での形相として、〕形相から形相に転ずる場所といふ如きものとなる」(同書、199頁)事態。

つまり、特殊＝個物＝一

般

また、西田は、矛盾的統一に含まれる特殊なるものの唯一的限定〔≒個物の成立〕という出来事に関して、特殊なるもの〔≒主語S〕を包摂する一般者〔≒述語P〕においてはたらく「否定〔≒限定〕」(同書、204頁)の作用に言及している。この否定は、一方で、真に一般的なるものとしての具体的「一般者が無になる〔≒特殊の背後に於ける一般が消え失せて単に映す鏡となる〕」、いわば神の自己無化(ケノーシス)にも

比すべき事態であり、他方で、「自己の中にすべての特殊を肯定すると共に、総ての特殊を否定する」、いわば被造物に対する神の慈悲・赦しと殲滅・怒りにも比すべき事態であるとの指摘がなされた。この二重の「否定〔≒限定〕」をめぐる、佐野先生が再び「数の世界」を取り上げられたので、また、「唯一なるものから唯一なるものに移り行く」（同書、204頁）という一文に関連すると思われるので、以前のプロトコルの一部を、以下に再掲しておく。

【第264回山口西田読書会（＝2021年3月6日開催分）のプロトコルより（同書、193頁辺りの要約）】
「矛盾的限定によって構成せられたる対象界」（例えば経験の助けを借りずに諸々の数学的認識〔演算や幾何学の根本命題〕が成り立つ「数理の世界」）においては、一般と特殊との間に、両者の間隙を埋め、両者を結合する媒介者としての「超越的にして不変なる基体」は必要とされない。なぜなら、一般的なるもの（＝「数」という純粹概念、例えば「自然数」）が即特殊化の原理〔≒1から始めて、それに順次1を足していくという「自然数」の定義〕であると同時に、特殊なるもの（＝1,2,3……）を成立させる場所だからである。そこではむしろ、特殊なるもの（＝1,2,3……）が基体という意義をもつことになる。すなわち、特殊なるものが、一般なるものからその規定様式〔≒否定＝限定される仕方〕を受け取ると同時に〔≒諸々の自然数が、1から始めてそれに順次1を足して得られる数として、自然数という一般概念の側から規定されると同時に〕、各々が相互に否定し合うことによって〔≒1は2でも3でもない数、2は1でも3でもない数、3は1でも2でもない数……として、これらの数自身が相互に規定し合うことによって〕、一個の全体を統一的に形成する〔≒自然数の集合を成す〕ことになる。さらに進んで、一個の全体の中で各々が特定の部分を形成する「各自唯一なる個体」となる〔≒各々の自然数が、それ以外ではないまさに「この数」として、自然数の集合の内部で自らの場所を占めることになる〕。】

*5月2日に加筆修正（末永記）